

# 『旧伊勢神戸藩主本多家史料』の概要

——その緒言と序章——

若林喜三郎

今般本学史学研究所では、旧伊勢神戸藩主本多家文書（本多康彦氏襲蔵）が刊行されることとなった。文書のみならず調査中に得た考古学的諸史料を末尾に付することになったので、表題を「本多家史料」としたのである。

ここに、その概要として「緒言」と「序章」とを抽出したのは、本書の内容、つまり神戸藩、および本多家とその襲蔵文書の概略とが一目で理解できるようにと考えたからであるが、すでに本誌をかりて発表した筆者の論考を転載した箇所も多いので、重複する部分もあるということをおことわりしておかねばならない。

## 一、緒言

本学史学研究所顧問の本多康彦氏は、旧伊勢神戸藩主本多家の末孫であるが、昭和五十五年に家蔵の文書一切を同研究所に寄託された。

同家は、江州膳所藩主本多家の分家で一万石、その二代忠統のとき伊勢国河曲郡神戸に封ぜられ、やがて、城持ちに昇格、五千石を増された。忠統は八代將軍吉宗に引立てられて、永らく若年寄をつとめ、いわゆる享保の改革を扶けたので、この栄誉はその功によったものである。

同家の襲蔵文書は、文書・記録約一一〇通・四〇冊、典籍類約五〇冊、数量はさまざま多くはないが、大名家の文書としては、基本的な領知目

『旧伊勢神戸藩主本多家史料』の概要

『旧伊勢神戸藩主本多家史料』の概要

録や家譜類、それに忠統の若年寄関係の切紙類、八代忠貫の明治維新期の文書など重要史料が含まれている。

同家は戦時中しばしばの空襲のため、襲蔵文書の多くを失ったが、ともかくもこれだけの数量が保存されたのは、全く当主康彦氏の熱意のためであり、それを大学に寄託して研究者の手にまかされたのは学問・教育に対する大きな功績であり、研究者にとっては多大な恩恵といわねばならない。

昭和五十五年四月、これとほぼ時を同じくして、本学に教授として招かれた筆者は、日本近世史を専攻している関係上、同文書のうち、政治・経済に関する部分の整理・紹介を一任されるという幸運に恵まれることになった。

しかし、当時はまだ筆者も石川県白山麓の『尾口村史』や、能登の『内浦町史』の編集集中であり、『北浜二丁目長文書』（大阪市史編纂所刊行）や、『年々留——錢屋五兵衛日記——』（日生財団助成・法政大学出版局刊行）も執筆中で、もっとも繁忙な時期でもあった。

かたがた、その整理・筆写には、学生の勉学に資してほしいという藤井理事長のご意向もあったので、学生有志をもって近世文書研究会を組織し、できる限りその作業に参加させることとした。そして、筆者としては、本学論集の誌上をかりて、本多家文書の紹介を目的とした論文を寄稿してきた。それは左の如くである。

A、明治三年神戸藩の藩制取調書について（第一五号・昭和五六年）

本多家の襲蔵文書中、明治三年の『藩制取調書』を分析して、幕末維新期の藩情を明らかにした。

B、本多領神戸藩の成立とその歴史的背景（第一六号・同五七年）

神戸藩の初代藩主本多忠統の事蹟を、『本多家家譜』を史料として、将軍吉宗の享保改革と関連させて概観した。

C、本多家襲蔵若年寄関係文書について（第一八号・同五九年）

本誌第一六号において概観した本多忠統の事蹟を、さらに本多家に襲蔵される約一〇〇点の切紙・折紙類を分類・解説することによって、明らかにしようとした。

D、本多忠升<sup>たか</sup>の『旅の夢』について（第一九号・同六〇年）

六代藩主本多忠升が養孫忠貫に与えた教訓書『旅の夢』を通じて、後期の神戸藩の藩情を概観した。

E、本多家の維新史料(第二〇号・同六一年)

維新期の藩情については、すでにAにおいて概観したが、本号では『明治三年藩制取調書』を含めて明治六年までの所蔵文書を紹介した。

ここに、本多家文書を紹介するにあたり、まず序章として神戸藩と本多家の歴代について概観しておく。次いで第一編を文書目録とするが、通例のような書名・冊数などの羅列ではなく、その一々について適当な小解を付した。とくに典籍類のうち、貴重本と思われる『猗蘭台集』『猗蘭子』は本学教授中田勇次郎氏、荻生徂來の『政談』は本学学長日比野野文夫氏の特別寄稿をお願いした。

次に、第二編は文書抄録とし、『御定書享保集成(仮)』『領知目録』『本多家家譜』『分限帳』『明治五年御布令書留』の抄本を収載した。

さらに、第三編研究集録では、右に列記した筆者の論考を適宜修正して転載した。ここでは、諸文書、とくに若年寄関係文書・『旅の夢』『明治三年藩制取調書』などの分析を通じて、本多家と神戸藩の理解に資したいと考えたのである。

最後に、第四編本多家の遺蹟しきは、本多家史料の調査中に得た同家関係の遺蹟・遺物等のあらましを、この機会に紹介しようとするもので、その担当者本学教授藤井直正氏の手によってまとめられたものである。

前述のように、本書の成立にあたっては、文書の整理・複写・筆写から、原稿の清書・整理、印刷の校正等に至るまで、七年間の本学近世文書研究会の会員諸君の協力をえたが、とりわけ鹿林朋子・大谷(旧姓中川)浩子・新森(半田)昌子・永田(正井)乃利子・額田山美子・岸保江・綱沢啓子・友野みのり・折見(服部)由美・森下真由美・浜田園美・下釜豊美の諸君の手をわずらわすことが多かった。もっとも、編集の都合で、その成果をすべて収載することはできず、ずいぶん積み残しできたことは残念であったが、とりあえず、ここで氏名を明記してその労をねぎらいたいと思う。

## 二、序 章 神戸藩と本多氏の歴代

### はじめに

神戸藩の成立や歴代藩主の事績については、古くは、松野宗太郎の『藩祖長徳院殿猗蘭公御略伝』や伊藤清太郎の『神戸平原地方郷土史』（前後二編）、近くは『新編・鈴鹿市の歴史』や『鈴鹿市史』などの該当部分のほか、藩儒沢熊山の『神戸録』を敷衍した衣斐賢讓氏の『神戸録とその周辺』、衣斐弘行氏の「猗蘭の詩」（『涼火』12、所収）などがあり、もってその大要を把握することができる。よって、ここでは細部は一切それらにゆずり、それらを援用して概要を述べておくこととする。

### 一、伊勢神戸と本多氏以前の領主

まず神戸というのは、古代朝廷より特定の神社に寄せられた領民集団のことで神社の周辺に位置し、その神社に租庸調を納め、その財政的基盤となった。そして国司がその管理に任じた。

その数は、『延喜式』には全国に三五三カ所と記されているが、そのうち伊勢の神戸は次の如くであった。

安濃郡三五戸 一志郡二八戸 鈴鹿郡一〇戸  
河曲郡三八戸 桑名郡五戸 飯高郡三六戸  
六カ所 計一五二戸

飯野・多気・度会の全部が神郡であったのを除けば、河曲神戸が最高の戸数を擁するのは、河曲の地が文字通り鈴鹿川流域の中枢部を占め、経済・交通の中心地として発展しつつあったためで、河曲神戸が伊勢神戸の称を独占するに至ったのである。

やがて平安中期以後、令制は崩壊、国司・郡司は名ばかりで、地方は事実上各地の豪族の支配下に入り、とくに源平二氏の対立の時代とな

る。伊勢では平家一族がはびこり、伊勢平氏と称せられた。鎌倉・室町期も過ぎ、戦国時代に入るや、まさに群雄割拠で、北伊勢には四十八家、安濃川流域には長野氏、雲出川流域には北畠氏、鈴鹿川流域には平家の流れを汲む関氏一族が蟠踞していた。

河曲神戸に根拠をおいた神戸氏は、この関氏の支族で、正平二十二年、関盛政は領地を五子に分け、そのうち長子盛澄に神戸を与え、一族の統領としたという。これが関家神戸氏の祖で、神戸氏の略系譜は左の如くである。

#### 神戸氏略系譜

盛澄<sup>1</sup>—実重<sup>2</sup>—為盛<sup>3</sup>—具盛<sup>4</sup>—

—長盛<sup>5</sup>—利盛<sup>6</sup>—友盛<sup>7</sup>—信孝<sup>8</sup>（織田信長の三男）

これは南北朝時代から戦国時代に至る神戸氏の歴代であるが、八代信孝は織田信長の三男で、永禄十一年信長の伊勢進出にあたり、近江六角氏に通じていた友盛を威圧してその養女を配して養子とした。ときに信孝十一歳であった。そして、同年信長は弟信包<sup>かほ</sup>を安濃津城の長野工藤氏の養子に入れて、これと和している。

信長は、次いで一志郡多気にあつて伊勢国司を継承していた豪族北畠氏に迫り、元亀三年には当主具教<sup>とものり</sup>を屈服させて、自らの次子信雄<sup>かつ</sup>をその養子として北畠氏と国司職とを譲らせた。かくして信長の伊勢平定はようやく実現したのである。

戦国の世では、当人の意志を無視した人質や政略結婚など、近親相剋の世相にふさわしく人的資源として戦略に利用され、その実例は枚挙にいとまがないが、げんに織田信長自身の夫人や妹、さらに女<sup>むすめ</sup>までも政略結婚の苦をなめたことは余りにも有名である。信長が二・三男から自分の弟まで相次いで神戸・長野・北畠の養子として送り込んだことは、当時の北伊勢地方が戦略上如何に重要な地域とみられていたかということをかたるものである。

もちろん、新兵器・新戦術採用によって、戦闘もいよいよエスカレートする。天正二年には伊勢長島の一向一揆討伐を終り、同四年には安土城築城、信長はこれに移る。同四年に始まった石山合戦が同八年に終り、北国一向一揆が平定されると、いよいよ西征が日程に上る。そこで後方の備えとして神戸城も拡張・強化が行われ、豪荘な五重の天守閣が築かれた。同年叔父信包<sup>かほ</sup>の安濃津城、兄信雄の松ヶ島城も、それぞれ強化された。

このあたりで信長得意の内線作戦がしきりに展開され、同九年には信雄が伊賀討伐を行なっている。やがて天正十年、信孝が四国征伐の命をうけ、亀山の関盛信の兵一万五千とともに泉州堺浦に結集したが、伊勢地方は、東に対する防壁であるとともに、西に対しては兵站基地であったのである。しかし、その六月二日、本能寺の変によって信長は急死、これが織田氏から豊臣氏への権力推移の動機となり、神戸の地も、その運命を大きく変えることになったので、もう少し神戸を中心に、激しい世情のうごきをみておこう。

織田信長憤死のとき、長男信忠はそれに殉じたのであるから、信孝・信雄兄弟は協力してその跡を守るべきところ、日頃の不仲を老獪な秀吉に利用され、身を滅ぼした観がある。すなわち、秀吉の明智征伐に参戦して神戸に還った信孝は、柴田勝家と結んで秀吉に抗し、秀吉の柴田征伐のさなか、当時秀吉についていた兄信雄に追われ、同十一年四月、知多半島の一寺院で自刃した。

神戸城はそれ以前に高岡城主小島兵部に授けられていたが、天正十一年五月、信雄の麾下林正武がその小島からこれを接取し、神戸与五郎と称した。その信雄が、また徳川家康と結んで秀吉と戦うことになったため、神戸城は翌十二年、秀吉の臣蒲生氏郷に攻められて落城、同年夏には、生駒親正に与えられた。同十三年以後も、滝川雄利・水野忠重、再度滝川雄利と神戸城主は交代して、慶長五年の関ヶ原合戦に至った。但し、この間に、一五年間の治乱の跡を見下していた五重の天守閣は、文禄四年秀吉によって解体され桑名城に移されたという。

慶長期には、また天下は三転、徳川家康によって幕藩制が開かれることになるのであるが、神戸は、その端緒に領主を代えることになる。すなわち、関ヶ原合戦で大坂方に与した滝川雄利が敗戦後領地を没収され、そのあとをうけて、一柳直盛が入部、寛永十三年まで三五年間、五万石を領して神戸に居城した。

この直盛が、伊予西条に国替えとなつて赴任の途中大坂で急死、その後一五年間は四日市代官佐野平兵衛の支配下にあつたが、慶安三年、石川総長が一万石をもって神戸に入部、以後子総良・孫総茂と三代相次いだ。この間約八〇年、とくに総茂は能吏で寺社奉行をつとめたが、八代将軍吉宗にその才幹が認められ、若年寄・側用人と歴任した。後継者本多忠統と同様、この小藩での大役はその領国経営を圧迫したことと思われるが、総茂は、苛政に走らず、節約につとめ、城下の領民ら数十人が江戸に上り、領主留任の歎願をしたという。したがって居館の如きも天守閣喪失のあと、寛永十三年には残りの櫓なども桑名・亀山に配ばれ、石川氏の時代は陣屋住まいの情態であつた。

この神戸に城館を再築したのは、石川総茂のあとをうけて入部した本多忠統の晩年である。

## 二、本多家の諸流と神戸藩主本多家

もともと本多家は、三河以来徳川氏の譜代の重臣で、その支流はひろく各地に分布し、江戸中期には大名家一三家・旗本四五家をかぞえた(寛政重修諸家譜)。藩臣のうちでも、加賀の前田家の家臣本多氏のように、五万石を給せられた大身もあつた。<sup>(注)</sup>

(注) 前田家の重臣本多氏。初代政重は、徳川家康の重臣本多正信の二男。政重も家康に仕えていたが、人を斬って出奔し、関ヶ原会戦の前後、東西の差別なく、諸大名の家臣として渡り歩いたが、慶長十六年、再度前田利長に仕えて、やっと落付いた。封録は三万石であったが、幕府から新川郡の土地を命じられたとき、政重が父正信や兄正純に説いて安堵することを得たので、その功により二万石加増、五万石となったのである。明治二年八月、その権勢をきらわれて金沢城内で暗殺された本多政均は、その子孫である。

なお、本家の本多家は、正純も幕府の執政として活躍、宇都宮で十五万石を給せられたものの、元和八年改易となったが、加賀の本多家は藩臣ながら明治以後も男爵家として永続した。

いま、その大名家の諸流の概略を、本多康彦氏の手記によって迎ってみると、左の如くである。

本多氏は三河の大氏族で、わかれて、伊奈本多・平八郎本多・土井本多・西城本多・鬼作左本多などとなった。伊奈は東三河の郷名、土井・西城は西三河の郷名で、その原流となった所領を表わしている。また平八郎流は本多平八郎忠勝の系統であり、鬼作左流は鬼作左と呼ばれた三河三奉行の一人、本多作左衛門重次の流れである。

右のうち、伊奈本多の根拠地は小坂井町伊奈で、本多氏の宗家であり、古くから文献に表われている。徳川家とは家康の祖父松平清康の頃より親交があつた。家康の吉田攻めには忠次が先陣となつて働き、長篠の戦にも加わつたが、その没後酒井忠次の二男康俊がその後を継いだ。康俊は関東移封により、下総国五千石を与えられ、関ヶ原戦の直後には一時吉田城を守り、翌年西尾二万石に移り、元和三年には戸田氏鉄の跡を受けて、膳所三万石の城主となった。しかるに康俊の嫡子俊次は一旦伊勢亀山に移つたが、慶安四年再び膳所に戻つて七万石を領した。以来代々この地にあつて幕末に至つたのである。

この本多家の分家が伊勢神戸と三河西端の両家である。ほかに土井本多の駿河田中・平八郎本多の三河岡崎・播磨山崎・陸奥泉、鬼作左本多が越前武生の各領主となつた。この九家が幕末には残っていたが、現在では、さらに四家が退転して、わずかに本多康忠(膳所)・本多康彦(神

『旧伊勢神戸藩主本多家史料』の概要

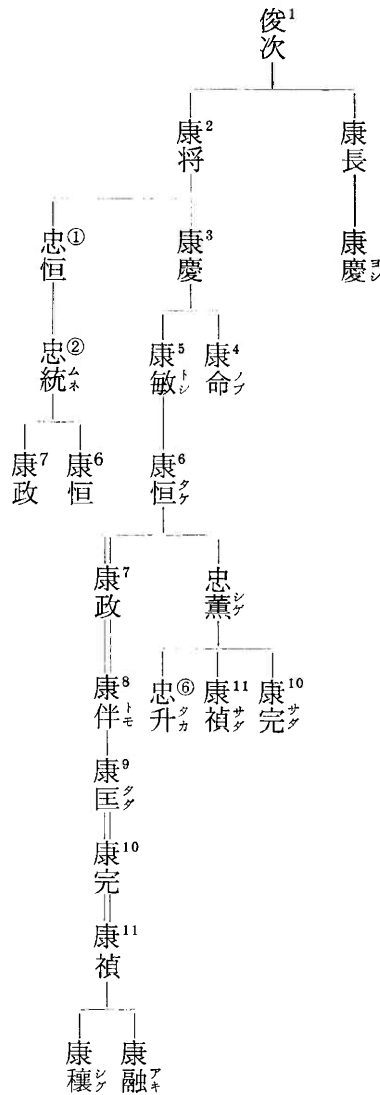
戸)・本多紀雄(駿河田中)・本多隆将(三河岡崎)・本多忠頼(陸奥泉)の五家より残されていないのである。

ところで、当面の課題である伊勢神戸藩主於多家について、その本家近江膳所藩主本多家の動勢をみておくと、前述のように亀山から膳所に復帰した俊次は二万石加増で七万石を与えられたが、京都に近接する地点にあり、「禁裏守護」の重要な役割を荷うことになった。事実、俊次の二男康将は京都所司代の相談役的任務を帯びており、以後代々防火・防衛のため上洛している。

この膳所本多家から康将の二男忠恒家が分出した理由については、いづれ本書研究集録第一章において考察するが、もともと康将には若死にした兄康長の嫡子康慶を養子として家を継がせたため、実子忠恒を分家として独立させたのである。当然両家の関係は親密で、忠恒は分家しても膳所を離れなかったし、その子忠統は子沢山であったから、二人までも本家の養子となって跡を継いでいる。六代康恒と七代康政がこれであるが、逆に神戸藩でも五代忠裔には継嗣なく、本家により忠升を養子に迎えている。

以下『新修・大津市史』第四巻を参考にして膳所藩主本多家の略系譜を掲げておく。

膳所藩主本多家略系譜



(注) 1、数字は膳所藩主を、○で囲んだ数字は神戸藩主の代数を示す。

2、『本多家家譜』には、忠升は本家本多家の「康年男」とあるが、康年を検索することができないので、通説通り「忠薫四男」を採った。



神戸藩主本多家歴代一覽

代名	幼名	初名	続柄	官位	雅号	年齢	藩主在職	主要な役職
初 忠恒	団七郎	康量	康将(本家) 二男	從五位下 伊予守	大乾、猗蘭、雪山、拙翁、宗範、楽堂、不言斎、白蓮子、長日庵、楽々斎、郁文	明暦三、五、九 宝永元、一一、一〇(四八)	延宝七、六、一九 宝永元、一一、一〇	駿州田中城在番、京都所司代参府 中京都火消役、本所火消役
2 忠統	恒弥 兵部	忠良 忠梁	忠恒 二男	從五位下 伊予守	元禄四、六、一八 宝暦七、二、二九(六七)	宝永元、一二、二三 享保一七、七、五(神戸) 寛延三、一一、一九	本所材木火消役、小姓、京都火消 役、大番頭、京都二条在番、奏者 番・寺社奉行兼役、若年寄	
3 忠永	留之助 内膳	統房	忠統 五男	從五位下 丹後守 上総介	随翁、清秋、宗瑜、青山、白石、天錫、長月庵	享保九、五、一七 文化一四、五、一七(九四)	寛延三、一一、一九 宝暦一〇、一〇、一三	
4 忠興	弥三郎	忠繁	忠篤 (忠統三男) 嫡子	從五位下 内膳正 丹後守		寛保二、一一、二五 明和三、七、一四(二五)	宝暦一〇、一〇、二三 明和三、七、一四	聖堂再建御用掛
5 忠齋	駒之助	忠慶 忠京	忠永 四男	從五位下 伊予守	沢山、暮山、高丘	宝暦五、九、一一 享和三、一、二三(四九)	明和三、九、七 享和三、一、二三	聖堂聖像遷座御用
6 忠升	説三郎	忠敬	忠薫(本家) 四男	從五位下 丹後守 伊予守 上総介	君積、昧翁、鹿門、竹遷、有効、宗些、子劔、冬日庵、幽篁斎、冠岳、不老、泉翁	寛政三、一〇、九 安政六、八、二三(六九)	享和三、二、一四 天保一一、九、二〇	
7 忠寛	駒之助 恒弥	忠都	忠升 長男	從五位下 伊予守	士美、君徳、翠桐、嵩陵、楽々斎、仙岳、清真堂	文政一〇、一、二〇 明治一八、一一、二〇(五九)	天保一一、九、二〇 安政四、四、二六	
8 忠貫	敬之丞	正進 内膳	戸沢正実 弟	正四位 河内守		天保四、一一、二八 明治三二、六、二〇(六六)	安政四、四、二六 明治二、六、一七	山田奉行、皇居警衛

(注)

- 歴代の役職は、ほとんど竹橋・馬場先・一橋・半蔵口・田安・和田倉の御門番および日光祭礼奉行代、大坂加番代などをつとめているので、この表にはそれ以外のものだけを記載した。
- 忠統は宝永八年二月一三日に至って初めて河内国西代に内部している。
- 忠升は、通説に於いて、本家の本多忠薫の四男とした。
- 七代藩主は、本多家の「家譜」にしたがって、「忠寛」とした。

『旧伊勢神戸藩主本多家史料』の概要

さらには、歴代藩主中、もっとも活躍した二代忠統が京都火消役・京都二条在番、さらに若年寄となってからも幕府の京都政策を担当するようになり、それが五千石加増・城持ちへの昇格につながると思われること、最後の八代忠貫が、幕末維新の転換期に山田奉行から京都御所警衛に任じられたことが、大きな功績となっている。「禁裏守護」を本来の任務として来た本家膳所藩との因縁ともいえるべきものであろう。

神戸藩の歴代の事績は、本書にあつては、『本多家家譜』その他の史料類、および「研究集録」の諸論考において触れることになるので、ここでは、旧著に手を加え、この家の歴代の一覧を表示するにとどめる(前頁一覽)。

### 三、最後の藩主本多忠貫

歴代藩主のうごきは、『家譜』によって、ほぼうかがえるが、忠貫についてはほとんど記述がない。それに、最後の藩主として活躍した人物であるから、それについて、いささか付記しておこうと思う。

忠貫は、出羽国新庄城主戸沢上総介正実の弟で、本多忠寛の養子となり安政四年四月二十六日に家督をついだ。時あたかも幕末動乱期にあたり、この小藩も風浪にもまれる小船の如き風情であったが、小藩なりにその存在を示しつつ、それを乗りこえたのは、少からず幸運に恵まれたからともいえるが、忠貫がそれに耐える人物であったからでもあろうと考えられる。

幸運といえば、先代忠寛のとき天保十四年の水野忠邦の土地令で、もしこれが適用されると、本多家の河内の所領が失われることになったのである。代替地が約束されるとはいえ、藩の重要財源を失うことになるのであったが、幸いにも、この案は各方面の反対により沙汰止みとなったのである。さらに忠貫の世となつては、文久三年八月の天誅組の挙兵に際し、本多領河内の長野詰代官吉川治太夫以下がこれを支援したため、処罰される事件が勃発したが(治太夫は逮捕護送中自殺)、幕末匆忙の折からとて見逃されたらしく、藩はその責めをまぬがれたのである。

さらに、同年十月、忠貫は山田奉行に任じられている。これは、元来一千石級の旗本などの定職であったが、小禄といえども一万五千石の大名家本多忠貫に下命されたのは、幕末内外情勢の緊迫によるものであろう。

彼は慶応四年七月まで勤めたが、譜代の小藩として進退の難しい時節に、山田奉行という絶好の安全地帯にかくれて、天下の形勢を観望することを得た。幕府に深い恩義を有する神戸藩が、下手をすれば命とりともなりかねない天誅組一件の責めをまぬがれ、他方朝廷側にも好感をも

たれたことは、非常な幸運とせねばならなかった。

ここで、周辺地区の諸藩の動勢をうかがってみると、まず本家の膳所藩では、「禁裏守護」を本来の任務としていた関係上尊攘派が優勢であった。しかるに、文久三年八月の政変以後保守派が抬頭し、両派の対立からお定まりのテロ事件、果ては勤王派志士一人の処刑に発展し、志士らが獄中に書いたこより書きの絵画や詩歌が、悲劇の記念として遺されている（竹内将人『膳所六万石史』・『新修・大津市史』第四巻）。

さらに伊勢では、小藩ながら二万石の孤野藩が勤王的立場で一貫していたのに対して、会津藩とともに幕末期を幕府のために戦い続けた桑名藩（二万石）のほかには外様の大藩で、幕府方に忠誠を尽しながら、鳥羽・伏見の戦後一転して官軍に寝返った津藩（三万石）、同様に佐幕的立場からどたん場になって官軍に降らねばならなかった亀山藩（六万石）や鳥羽藩（三万石）のように、右往左往せねばならなかったのに対し（『新編・鈴鹿市の歴史』）、神戸藩は前述のように超然たる立場を保持することができた。

やがて慶応四年七月、南伊勢に度会府わたらいがおかれ、山田奉行が廃止されたので、本多忠貫は新任の度会府知事橋本実梁まねやなと交代して八月五日に上洛、早速皇居警衛を命じられ、翌明治二年正月まで滞京した。かくして、七年ぶりに帰国した忠貫を待っていたのは、同年六月の版籍奉還であった。そして、その二年後、廃藩置県となり、各藩主は封地を去って東京住いを命じられることとなった。

その後の忠貫の動勢を、『神戸平原地方郷土史』などによって追ってみると、忠貫はすでに版籍奉還と同時に華族に列せられていたが、明治十七年子爵を賜わり、宮中勤番・宮中祇候宸翰御用掛・東照宮宮司などを歴任し、明治三十一年春、正四位に叙せられたが、同年六月、東京において没した。享年六十六であった。

## おわりに

本多忠貫の跡は嫡孫忠鋒ただとね、その長男忠照と継がれたが、忠照は昭和五年十月、学習院に在学中死去し、嗣子がなかったので膳所の本多家を継いでいた康直（忠貫の弟）の三男で、桃谷家の養子となっていた恒彦が、忠照の後継者として迎えられた。当主康彦氏はその長男で、前述のように徳川家譜代の重臣として、大名家一三家をかぞえた名門本多家のうち、わずかに残存する五家の一つとして、その命脈を伝えられているのである。